

ベトナムの建設ビジネスの事情と進出の留意点

石川 幸

現在、ホーチミン市内では国家都市開発プログラム※や衛星都市計画に基づき、多くの建設工事が行われています。ベトナムの建設業界の市場規模は、2012年から2016年の4年間で、381兆7,000億ドン（約1兆8,320億円）から616兆7,000億ドン（約3兆800億円）へと成長し、年間の平均成長率13%と、非常に著しいスピードで拡大しています。同時期の日本の年間平均成長率はわずか3%と言われており、ベトナムの建設分野が成長産業である事が伺えます。



ベトナム大手デベロッパー「ピングループ」が1万戸以上入居できる「ピンホーム」という大規模なマンション建設を行い、大部分が完成前に完売した事で話題を集めました。

また、同敷地内にベトナム最高層81階建ての「ランドマーク81」ビルが建設され、完成した同ビル内にはカレー専門店の「Coco 壱番屋」が8月に新しくオープンしました。

近年、多くの高層ビルが急ピッチで建設され、日系企業の建設業界のベトナム進出は、従来のODA案件の受注に加え、現地でのビジネスチャンスに可能性を感じ進出する企業が増えています。特に、日本側での技能実習生受入をきっかけに、実習生の帰国時期と合わせて進出を検討する企業が増加傾向にあります。

＜事情①ブロックの使用と耐久性＞

しかし、ベトナムで日本の建設技術や製品の需要があるかと言うと、「高品質なのは理解しているがコスト的に厳しい」という声を現地企業からよく耳にします。ベトナムの建設現場で、まず驚くのが、高層ビルでも、鉄筋にコンクリートを流し込んだ梁に、赤いブロックを積み上げて建設していることです。

ベトナムでは建設用に使用されるブロックが安価なことに加え、過去に地震などの大きな災害がなかったことから、耐震性や耐久性といった面で建設技術が先進国と比べ非常に遅れていると言えます。建設技術が低く、老朽化も早く、物件を購入しても長期間の保有には適していないものもあると言われています。日系建

設企業の技術力は、今後、都市の発展の中で需要が高まる可能性はあるものの、現状は、そこまでの高品質が求められていないという課題があると言えます。



(ブロック積上で建設された高層ビル)



＜事情② 技能実習生と進出＞

技能実習生の受入をきっかけに進出を検討する企業が増えている一方で、ベトナムの建設現場での勤務は、いわゆる「ワーカー職」となり、労働環境が厳しく（低賃金、重労働）、日本から帰国後、同業種で仕事をしたいと考えている元実習生は減少傾向と言われています。政府発表の2019年最低賃金案は、1か月の最低賃金が約14,222円（第四地区：周辺村落部）～約20,358円（第一地区：ホーチミン等都市部）で、実習生の給与の7～10分の1程度となります。実習終了後、ベトナムに帰国する社員の活躍に期待し、現地進出を検討するのであれば、帰国前に給与などの条件面で折合いを付けておく必要があります。

また、現場の安全性も、日本と比較し危険な労働環境であり、建設足場等も、安全性や効率性などが考慮されておらず、命綱無しで作業している現場もよく目にします。



(命綱なしでの作業)

＜総括と留意点＞

著しい成長のベトナム建設分野に魅力を感じ、進出を検討する日系企業は近年増加傾向にあります。一方、進出前に調査・検討しなければならない課題も多くあります。

例えば、日系同業他社のみならず、台湾や韓国等の存在も無視できません。また、日系企業間での受発注のみでは、案件数が限られる一方で、現地企業案件の受注には「資金がきちんと回収できるのか」等の課題が発生します。更に、技能実習生の帰国後の活躍を期待するのであれば、労働条件や労働環境の考慮が重要です。これらの課題を念頭におき、市場調査や視察をされる事をお勧めします。

※ベトナム建設省発表 2020年までの都市開発計画(決定第445号/2009/QD-TTg 及び第1659号/2012/QD-TTgによる)